

キルケゴールのレトリック——キリスト教批判の実験的試み——

谷塚巖

序論

キルケゴール研究は、キルケゴールの諸著作がドイツ語に翻訳されたところに本格化した。特にシュレンプらによるイェーナ版全集の刊行が進められた 1920 年代は、キルケゴール・ルネッサンスと呼ばれる研究状況が到来し、神学の分野では、弁証神学という新しい神学の潮流が形づくられた。また 1950 年代には、実存主義の中心にキルケゴールの思想が位置づけられるようになり、哲学の分野でも重要な位置を占めるようになった。1960 年代後半から 1970 年代にかけての、構造主義や言語批判を中心とするいわゆるポスト・モダンと呼ばれる思想状況のもとでは、「言語」に焦点を合わせた新しいキルケゴールの思想理解が試みられるようになった。1990 年代以降は、デンマーク・キルケゴール研究センターの主導によって、文献学にもとづく校訂版キルケゴール全集 (*Søren Kierkegaards Skrifter*, 1997-2013) の刊行が進められ、それと並行する形で歴史的研究が本格化し、キルケゴールの同時代を理解するためのさまざまな研究成果が生み出された。現在のキルケゴール研究では、ポスト・モダン以降の思想状況や近年の歴史的研究の成果を踏まえつつ、さらにデンマーク語原典としての校訂版全集にもとづいて、キルケゴールの思想をその根源から見直すことが求められている。

第 I 部 キルケゴールとレトリック

キルケゴールの著述活動において目指されていたのは、読者——19 世紀デンマークの読者層——に対して「キリスト者である」とはどういうことなのかを問いただすことであった。それは、読者自身の「キリスト者」としての「自己認識」を揺さぶり、問いにかけることにほかならなかった。先行研究では、著述活動を介したこうしたキルケゴールの働きかけを「ソクラテ斯的対話」として理解することが試みられてきた (H・ディームや M・C・テイラー、稲村秀一らの研究)。第 I 部では、ポスト・モダン以降の研究状況を踏まえて (L・マッキーの研究)、キルケゴールの言語活動による読者へのこうした働きかけを、レトリックとして理解し直すことが試みられる。レトリックは、説得の技術や詩的表現の技術に関する学科として、アリストテレス以来の伝統を有するが、20 世紀に入り、レトリックに「発見的認識」を形づくる新たな機能があることが見いだされ、注目し直されてきている。本論の第 I 部を構成する第 2 章から第 4 章では、キルケゴールの著述活動や仮名、伝達が、そうしたレトリックをめぐる現代の議論の中で十分に理解されうることが示される。

第 2 章では、キルケゴールの前期著述活動とその思想的文脈について論じられる。キルケゴールは、みづからを「宗教的著述家」として規定する。キルケゴールの著述の意図や形式には、レッシングからの強い影響が見られる。レッシングは、キリスト教に対して両義的な

立場を取っていたが、キルケゴールはその立場を継承しつつ、仮名と実名との使い分けによる著述活動という独自の仕方では具体化したのである。すなわちキルケゴールは、その著述活動において、「キリスト者になる」という課題を一貫して追求したのであるが、それはレッスティングの立場を、著述の二重性という仕方では具体化することによってであった。キルケゴールは、レッスティングの立場を受け継ぎつつ、それを独自の仕方では読者に関わる問題として提示し直したのである。

第3章では、キルケゴールの仮名性について論じられる。前章で明らかになったように、キルケゴールの仮名と実名は、キリスト教に対する否定と肯定という二つの相反する立場をそれぞれ代表している。その否定的立場が、キルケゴールにおける仮名性の問題として捉えられる。キルケゴールの課題は、「キリスト者になる」ことを伝達すること、すなわち「実存の伝達」にある。キルケゴールはこの課題を遂行するために、伝達者は「現実性」ではなく「可能性」の形式を用いなければならないと考える。つまり仮名とは、この伝達形式を実現させるために用いられた文学上の虚構なのである。このようにして仮名は、詩的な創作活動を担うものとなる。そして仮名によって、すなわち「可能性」という形式によって、「内面的現実性」の伝達が試みられるのである。こうして、受け手である読者がその伝達をいかにして受容するかが問われることになるのである。

第4章では、キルケゴールがコミュニケーションに関わる問題をどのように考えていたのかについて論じられる。キルケゴールが問題にしたのは、同時代において、「倫理的伝達」がそれにふさわしくない形式で行われているということである（「知識」の伝達）。キルケゴールにとって「倫理的伝達」のもとで問われるべきは、「文芸」の伝達であり、それは「現実化」、あるいは「受容者」の「能動的行為」として実現されなければならない。キルケゴールは、この伝達は「間接的」にしかなされえないと考える。こうして「知識」の伝達との区別が試みられるのである。一方で、伝達されるべきは「キリスト者になる」こと、厳密には「神の前に一人で立つ」ことである。ここには「宗教的なもの」という契機が入り込んでいる。キルケゴールは、この契機は外部から与えられなければならないと考える。これは、「知識」の伝達によって、すなわち「直接的伝達」によってなされる。こうして、「間接的—直接的伝達」、「倫理的—宗教的伝達」という概念が提示されることになるのである。キルケゴールが、同時代において最もふさわしい形式として提示しようとしたキリスト教的伝達とは、この二重化された伝達のことなのである。

第II部 キルケゴールの倫理思想再考

第I部で論じられたのは、キルケゴールの思想の形式的側面であり、そこに現代において新たに注目されてきているレトリックの機能を見いだすことができるということである。キルケゴールは、仮名性という文学上の虚構を介して、読者自身の「自己認識」を揺さぶろうとするわけであるが、レトリックの役割はまさにこのような「発見的認識」を形づくることにある。本論の第II部を構成する第5章から第7章では、読者において「自己認識」が

問いただされるということが、具体的にどういうことなのかが論じられ、それが「倫理的なもの」の内容をなしていることが明らかにされる。

第5章では、キルケゴールの「あれかーこれか」について論じられる。「あれかーこれか」は、同時代において論争されていた排中律の問題をめぐってミュンスターが用いていた表現である。それがキルケゴールによって独自の仕方を受け取り直されたのである。キルケゴールは、その表現を、どちらか一方を選択するというよりかは、むしろ、どちらも選びえた「あれかーこれか」の状況そのものを指し示そうとすることに用いる。「あれかーこれか」と呼びかけられた読者は、過去における未決定の状態、言い換えれば、過去において選択された事柄がまだ未来的なものであった、「可能性」の時点にまで連れ戻されることになる。そのようにして、行為に関する決定論がしりぞけられるのである。「あれかーこれか」とは、現実にならなかった「可能性」を読者に気づかせるためのレトリックにほかならない。

第6章では、「自己自身に責めを帰す」という問題がキルケゴールの自由論との関連で論じられる。前章で、「あれかーこれか」とは過去になされたある選択の地点にまで読者を連れ戻すための効果的な表現であることが明らかにされた。読者は、自己自身に向き直り、「あれかーこれか」であったこと、つまり「自由であった」ことにまず気づかなければならない。なぜなら、読者はそのようにしてようやく選択の「責め」を「自己」に問うことができるようになるからである。キルケゴールは、こうした「責め」と「自由」に関する問題を、アリストテレスやデカルト、ライプニッツの自由論を受け取り直す形で展開している。そして、選択された事柄の「責め」を自己のものとして負うことこそが「真の積極的な自由」であると論じる。重要なのは、そのような第二の選択において、「自己」があらわになると考えられている点である。すなわち、読者は「あれかーこれか」と呼びかけられることによって、もう一つの選択の「可能性」があったことに気づかされる。読者はその気づきにおいて、「責め」を自己自身に措定するのか否かという、第二の「あれかーこれか」に直面させられることになるのである。

第7章では、「責めを自己自身に帰す」ということが「悔い」として理解されることが論じられる。キルケゴールは、「自己自身に責めを帰すこと」は「自己自身を選択すること」であり、そしてそのことが「悔い」にほかならないと考える。注目すべきは、このことが「現に生起すること」(Tilblivelse)というキルケゴールのいわゆる「生成」に関する理論に根拠づけられていることである。キルケゴールはヘーゲル論理学の歴史への適用に反駁する形で、「可能性から現実性への移行」というアリストテレスの運動論の概念的枠組みを受け取り直してみずからの議論を展開する。その際、現実とならなかった「可能性」に特に注意を向ける。つまり「現実になったこと」は、つねに、その反対の「可能性」をともなつて生起してくるということである。「悔い」が問えるのは、まさにそのような「可能性」が存在していたからにほかならない。こうして、「あれかーこれか」とは、過去の選択における「可能性」に読者を目覚めさせ、そして読者がその固有の「現実性」の「責め」を負うことによって、「悔い」を現実化させるためのレトリックであることが明らかになる。

結論

本論の論述によって明らかにされたのは、キルケゴールの著述を介した言語活動は、「発見的認識」を形づくるという現代のレトリックをめぐる議論の文脈において十分に理解されるということである。キルケゴールは、その前期著述活動をとおして、読者に対して「キリスト者になる」とはどういうことなのかを問いただそうとした。それは、「キリスト者」として「自己」を錯覚していることを、読者に気づかせることであつた。つまりキルケゴールは、読者の「自己」を問いただそうとしたのである。仮名という「可能性」の形式による著述活動は、この問い直しを読者において現実化させることを目的とするものであつた。読者は、仮名著作を読むことによって、「自己」の「可能性」を呼び覚まされるのである。この場合「可能性」とは、現実となるべきであり、かつなりえたにもかかわらず、現実にならなかつたものと解される。読者はこのようにして「自己」に向き直ることをへて、再度、「自己」を選ぶこと、つまり悔いることへといざなわれる。あるいは、少なくとも悔いることが、読者への倫理的な要請として示されるのである。キルケゴールのレトリックとは、「キリスト者」としての読者の「自己認識」を、仮名性という「可能性」の形式によって、読者において揺さぶり解体させようとする実験的な試みなのである。